

第3章 実践調査の結果

1. 実践調査結果の概要

(1) 実践調査の内容

平成20年度のヒアリング調査対象保育所のうち、マニュアルの整備、保育士の資質向上の取り組み等に関して先駆的な取り組みを行っていると考えられる保育所(清水台保育園)を対象に、本年度調査では a) 保育所における保育士育成方針・マニュアルの策定・実践、b)外部関係者による検討会(マニュアル評価検討委員会)を実施した。

このうち、保育所における実践調査としては a)の調査のみである。b)の調査については、調査対象保育所は既存のマニュアル等を検討委員会に提出するだけに留めた。

(2) 保育所において策定する「保育士育成方針・マニュアル」の内容

平成21年度に受け入れる保育士実習生または外部の一般保育士を対象とした「保育士育成方針・マニュアル」の内容としては、以下の5類型が想定される。いずれの類型を選択するかは保育所側の意向・実情を反映して決定した。本年度、清水台保育園では「タイプV」のマニュアルを開発、実践することとした。

【タイプⅠ】(実習生向け研修マニュアル)

実習生対象×全般的な保育士の資質向上を主たる目的とした育成・資質向上マニュアル(一部に遅れの早期発見・支援に係わる項目を含む)

【タイプⅡ】(実習生向け一般研修および遅れの早期発見・支援研修マニュアル)

実習生対象×遅れの早期発見・支援および全般的な保育士の資質向上の双方を目的とした育成・資質向上マニュアル

【タイプⅢ】(実習生向け遅れの早期発見・支援研修マニュアル)

実習生対象×遅れの早期発見・支援に関する資質向上を主たる目的とした育成・資質向上マニュアル(一部に全般的な保育士の資質向上に係わる項目を含む)

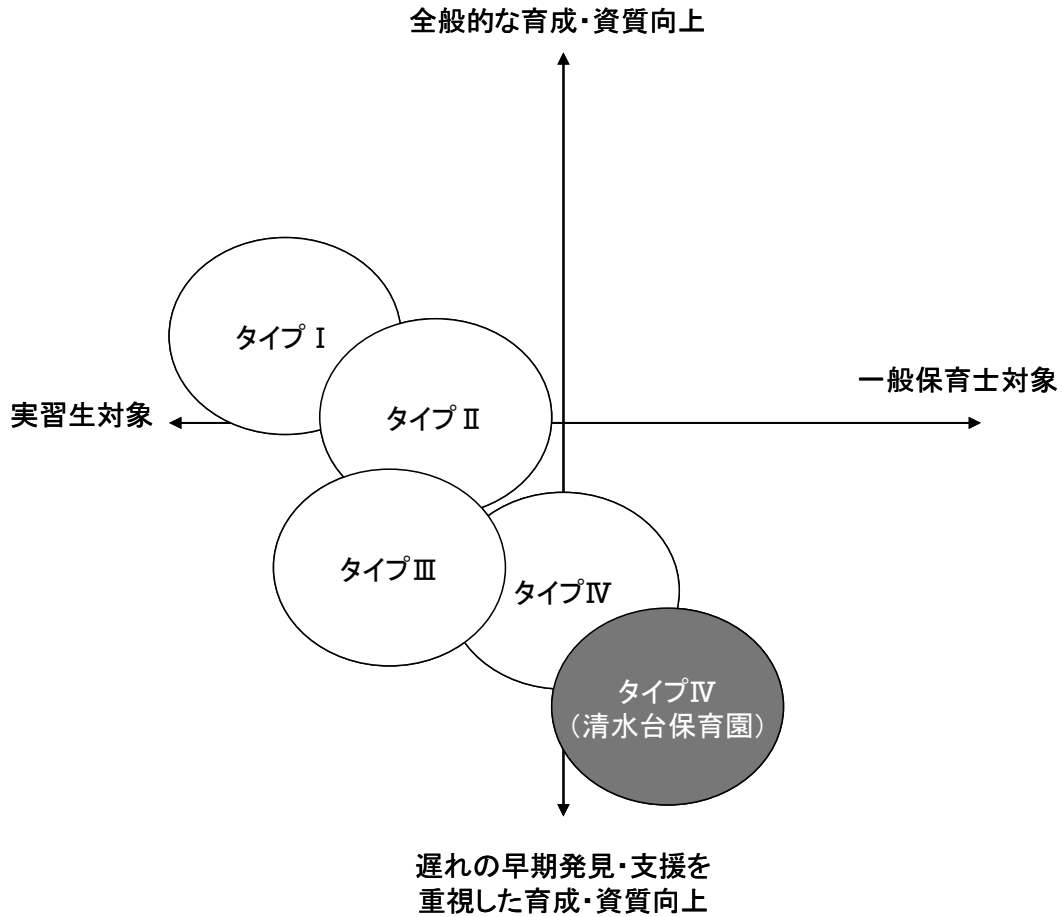
【タイプⅣ】(実習生・一般保育士向け遅れの早期発見・支援研修マニュアル)

実習生および一般保育士対象×遅れの早期発見・支援に関する資質向上を主たる目的とした育成・資質向上マニュアル(一部に全般的な保育士の資質向上に係わる項目を含む)

【タイプⅤ】(一般保育士向け遅れの早期発見・支援研修マニュアル)

主に一般保育士対象×遅れの早期発見・支援に関する育成・資質向上マニュアル

図表 103 マニュアル内容の分類イメージ



(3) 育成マニュアルの運用と成果の把握方法

育成マニュアルの運用方法については、調査対象保育所に一任するかたちとした。成果の把握方法としては以下のとおりである。

【保育士向け】

対象保育所での実践の前後において、保育士等を対象にアンケート調査またはヒアリング調査を実施する。

アンケートは各保育士を対象とし、日本総研が作成したアンケート票を実習修了時に配布・回収する。ヒアリングを行う場合は、実習修了時に日本総研担当者が保育所往訪し、保育士等に対して1時間程度のグループヒアリングを実施する。

【施設長向け】

育成方針・マニュアルが実際に保育士等の指導に関して有効に機能したかどうか、保育士による実践調査終了後、施設長に対するアンケート調査またはヒアリング調査を実施し、把握検証

する。

アンケート票は日本総研が作成し、実践調査終了時または終了後、保育所施設長宛郵送配布・回収する。ヒアリング調査を行う場合は、実践調査終了時または終了後、日本総研担当者が保育所往訪し、施設長に対して1～2時間程度ヒアリングを実施する。実践調査の実施にあたり、経験豊富な保育士を「指導担当」として置く場合は、施設長向けと合わせて、同様の内容のアンケート調査またはヒアリング調査を実施する。

アンケート調査またはヒアリング調査の内容としては次のような項目を設定した。

保育士向けアンケート (またはヒアリング) 項目案	施設長向けアンケート (またはヒアリング) 項目案
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 研修のねらい(研修期間を通して得ようとしたこと) ▶ 研修が自分の資質向上に役立ったか ▶ どのような点で向上したとを感じるか ▶ 遅れの早期発見・支援についてどのようなことに気づいたか、又は理解したか ▶ 遅れの早期発見・支援についての自分の能力が向上したとを感じるか ▶ 研修において、保育所側の指導は円滑、効果的だったか ▶ 研修内容は体系だったものであったか ▶ 研修のどこに問題点があると感じるか ▶ 自分の強みだと感じる能力及び弱みだと感じる能力(※子どもと接する能力、他の保育士等と連携する能力それぞれについて把握) ▶ (業務の中で)どのようにして能力向上を図りたいと考えるか ▶ (業務とは別に)今後どのような研修を受けてみたいか ▶ 研修全体についての満足度 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ マニュアル作成時の留意点、苦労した点 ▶ マニュアル作成に要した日数・コスト ▶ マニュアルの内容(項目) ▶ 重要項目 ▶ 運用時の課題とその原因 ▶ 運用がうまくいった点とその理由 ▶ 当初想定されたマニュアルの効果 ▶ マニュアル運用の結果、実際に得られた効果 ▶ 想定された効果と実際の効果のギャップとその原因 ▶ 効果の把握方法 ▶ マニュアルの改善の方向性 ▶ 改善の必要な項目 ▶ 具体的な改善内容

(4) 実践調査結果(結果から読み取れる示唆)

①保育士向けの運用の成果と課題

今回の実践調査では、清水台保育園では新任保育士を対象にし、遅れの早期発見・早期支援に関する保育士の資質向上を目的としてマニュアルの作成と活用を行った。その結果、マニュアル作成の主たる目的である保育士の資質向上における成果と課題として、次の3点を指摘できる。

a) 子どもの遅れの実践的な体験と理解促進 ～ 意識的、集中的な学習の機会提供

一点目の成果は、マニュアルを活用することにより、新任保育士が子どもの遅れについて、意識的に把握し理解しようとするきっかけが提供され、子どもを観察する「体験」と形式的な知識が実践化されることによって理解促進が図られたことである。

新任保育士は養成機関において体系的な知識として子どもの発達を学んでいるが、実際に遅れのある子どもを観察し、教科書などに書かれた形式的な知識を実感する機会は少ない。それゆえ新任保育士は、実際に子どもを観察する経験を通して発達に対する理解を深めていくものであり、先輩保育士もそのようにして資質を向上させてきたであろう。

今回のようにマニュアルを活用することにより、資質向上のスピードが速まったといえる。つまり、マニュアルを用いて、子どもの発達に意識を集中して一定期間、子どもと接することで、短期間に多くの気づきと学習を得られたと言える。

なお、こうした集中的な資質向上を実現するためには、経験豊富な担当保育士による日々のフィードバックとアドバイスが不可欠であったと言える。新任保育士は、実践を通して自分の観察や考え方が妥当なものかどうかを確かめることで資質を向上させていくため、1日という短いサイクルでフィードバックとアドバイスを与え、新任保育士の持つ形式的な知識を経験に裏づけされたものに変質させていくことが必要である。

同時に、新任保育士の指導担当となる先輩保育士が、フィードバックに割く時間を確保できるようにするための、クラスあるいは園全体でのサポートも課題であろう。

b) 資質向上の道筋の顕在化 ～ 信頼できる目標と学習課題の設定

二点目の成果は、新任保育士が、遅れのある子どもの早期発見・早期支援について「どのように観察し、判断できるようになれば良いのか」、「今、自分に不足している視点、知識は何なのか」を、目に見える形で把握できるようになり、自らのその後の資質向上における道筋が見えるようになったことである。

今回の実践例は、遅れのある子どもの早期発見・早期支援に関する体系的な知識・技術をまとめたガイドライン形式のものを作成した。これは、先輩保育士の持つ遅れのある子どもの早期発見・早期支援における実践的な経験と知識を、できるかぎりそのまま文字化したものである。実際、本事例においては、マニュアルの作成にあたって、主任保育士を中心として複数名の保育士が試行錯誤を繰り返してまとめている。

このような経緯で作成されたため、マニュアルの構成や表現自体が、先輩保育士の考え方や判断を表現した内容になっており、先輩保育士が自信を持ってマニュアルを活用できた。そのため、新任保育士は、マニュアルを、先輩保育士の経験と知識の詰まった信頼できるもの、当面自分が吸収すべき目標となるものとして捉えることができ、マニュアルの活用を通して自分が今後身につけるべき考え方や知識(=自分の学習課題)を自覚することができたと言える。

なお、このような学習効果が得られるためには、前述した「(指導にあたる)先輩保育士自身が自信を持って使うことができるマニュアルであること」に加えて、実際に先輩保育士がマニュアルを日々の保育に適用した例を見せることが重要である。つまり、新任保育士だけがマニュアルを利用するのではなく、先輩保育士も実際にマニュアルを活用してみせることで、新任保育士はその様子を見て学び、自分と先輩保育士の違い(=新任保育士にとっての学習課題)を具体的に理解する機会が得られたと言える。

c) 先輩保育士等とのコミュニケーションの円滑化と充実 ～ 言葉の共有

三点目の成果は、マニュアルを利用することで、新任保育士と先輩保育士とのコミュニケーションが円滑化になり、充実したことである。

遅れのある子どもの早期発見・早期支援では、子どもの状態を担当する保育士が共有し、園内での連携を図ることが重要だが、あいまいな状態の場合、その表現方法が保育士一人ひとりで少しずつ異なるために、情報共有に時間や手間(場合によっては誤解)が発生する場合もある。こうした“言葉の違い”は、保育の実践経験の少ない新任保育士と先輩保育士の間では、より頻繁に起こりうる。

今回の実践のように、マニュアルという客観的なツールを利用してコミュニケーションすることで、マニュアルの枠組みや表現を両者が使って情報共有するようになり、こうした“言葉の違い”を小さくすることができたと言える。保育の実践経験が豊富な指導担当保育士と、実践経験の少ない新任保育士という組み合わせだからこそ、このようなマニュアル活用のメリットがあると言えよう。

ただし、どのように表現を工夫しても理解にズレは生じる。マニュアルを作成する際に、マニュアルを主に利用する人を想定し、その人の経験や知識を踏まえ、分かりやすく、かつ普段から使う表現内容を選び取っていくことが課題となる。

②先輩保育士向けの運用の成果と課題

今回の実践調査において資質向上を図ろうとする主たる対象は新任保育士であった。しかし、マニュアルを作成したり活用したりする過程を通じて、先輩保育士にとっても以下のような成果と課題が見られた。

a) 先輩保育士の考え方や知識の整理 ～ 知識のたな卸しと振り返り

一点目の成果は、マニュアルの作成、活用の両方を通じて、先輩保育士にとっては、日々の

保育で蓄積された経験や知識をたな卸しし、自分が持つ考え方や知識を客観的に捉えなおすことができたことである。

保育士にとっては、日々の保育が最も重要な課題であり、特に遅れのある子どもの早期発見・早期支援においては、実際に接する子どものことを考え、保育を工夫し、実践することで精一杯という状況も多くあると思われる。だからこそ、一度立ち止まって振り返って考える(リフレクション)の機会を持つことが重要であろう。

今回実践調査を行った事例においては、マニュアルの作成に関わった園長、保育士から、「考え方や知識を整理する機会になった」とのコメントが聞かれた。日々の保育で感じている保育を取り巻く環境要因(少子化、核家族化、家庭の保育力の低下等)も含めてこの機会に整理することで、保育士が日々の保育に集中できるようにしたいとのコメントも聞かれた。

このような成果を得るためには、マニュアル作成をひとりでやらないこと、作成したマニュアルは園を挙げて活用することが重要となる。

作成段階で複数名の保育士が関わることで、特定の保育士の考え方や知識に偏った内容にすることを防ぐとともに、作成に関わった保育士にとっては作成過程を通じて、他の保育士の考え方や知識をじっくりと知り、学ぶ機会になる。これはマニュアルの活用段階でも同様であり、園を挙げて活用し、その結果を共有することで、保育士どうしの考え方や知識を共有する機会になろう。

ただし、マニュアルの作成は時間も労力も多大にかかるため、参考となるマニュアルの骨子あるいはマニュアル作成の進め方等が、すべての園が使えるような形で提供されることが望ましい。

b) 遅れのある子どもに関する保育指針として共有 ～ 園全体での考え方の共有

二点目の成果は、遅れのある子どもの早期発見・早期支援について、保育士がどうあるべきかの方針(ビジョン)が共有されたことである。

今回実践調査を行った事例では、遅れのある子どもの早期発見・早期支援の実践経験の豊富な主任保育士が中心になり、複数の保育士が一緒になってマニュアルを作成した。そのため、マニュアルの作成及び活用の過程を通じて、経験豊富な保育士に属していた考え方や知識が、各園にとって園全体で共有できる「遅れのある子どもの早期発見・早期支援における保育士が目指す考え方・知識」になったと言える。

さらに、園を挙げて共有できる方針(ビジョン)が作成されたことにより、遅れのある子どもの早期発見・早期支援における園全体での支援の仕組みや体制の必要性が共有されることとなるため、清水台保育園の事例では「園全体で保育士をバックアップする組織体制を整えやすくなる効果も期待できる」とのコメントも聞かれた。

これらの効果は、当初のマニュアル作成のねらい(新任保育士の資質向上)から見れば副次的なものである。しかし、特に地域ネットワークとの連携も含めた組織的な取り組みが必要な遅れのある子どもの早期発見・早期支援においては、非常に重要な効果だと言えよう。

こうした効果を得るためには、園が目指す保育のあり方や子どもの発達に対する理解まで掘り下げて考えながら、経験豊富な主任保育士等が中心となってマニュアルを作成することが重要である。ただし、誰もがこれらのマニュアル作成の知見を持つわけではないため、すべての園が利用できる、マニュアル作成の参考となる指針等の整備・普及も課題となろう。

2. 個別の実践調査結果

(1) 清水台保育園(1回目)

① 成果ヒアリング概要

ヒアリング日時	平成 21 年 12 月 15 日 13 時 30 分～16 時 30 分
ヒアリング対応者(施設側)	竹内麗子園長、玉川主任保育士、中川副主任保育士、小林副主任保育士

② マニュアルが求められていた背景

a) 遅れの早期発見・療育支援のための保育園での取り組み

(保育を取り巻く環境の変化)

- ・ 今の子どもは、3 歳児でも紙オムツをするなど排泄の自立の遅れ、身体意識の発達が未熟である。遅れの早期発見・療育支援に取り組む前提として、そうした環境の変化の影響も知っておく必要があると思う。(竹内園長)

(遅れの早期発見・療育支援の取り組み)

- ・ 新入園児は 5 月か 6 月くらいに、在園児は 8 月くらいに、MEPA-R を年 1 回作成している。3～5 歳の縦割りクラスはクラスに年齢リーダーとなる保育士が中心となって MEPA-R をつけている。(竹内園長)
- ・ 縦割りクラス(3～5 歳児)は複数の保育士がつけて検討するが、0～2 歳児はほぼ 1 人の保育士がつけている。(小林先生、中川先生)
- ・ 新任保育士も含め、現場の保育士が話し合いながら作成している。1 人ひとりについてつける部分と、集団の中での行動を見る部分とがある。その上で、大まかなムーブメントプログラムの方針を定め、方針と月齢別達成課題を踏まえて実践を行っていく。(玉川先生)
- ・ 子ども 1 人ひとりのすべての情報は個別にファイリングしている。(竹内園長)

(遅れのある子どもの早期発見・療育支援に取り組む上での課題)

- ・ MEPA は、保育に科学性・理論を持ち込んだという点で優れている。それは保育士 1 人ひとりの考え方の改革も可能にする。子どもの成長に合わせて記述できる能力を育てることが重要だと考えている。
そのためにも、MEPA-R をいかに保育の中に位置づけていくかが重要だ。健康な子どもと気になる子を見極めるには、新任の保育士にとっては各年齢の発達を理解し、保育していくことがポイントとなる。(竹内園長)

b) 遅れの早期発見と支援における保育士の資質向上に関する課題

(新任保育士の資質向上の取り組み)

- ・ 新任保育士が MEPA-R を活用するスキルを身につけるためには、実践の繰り返し、ケース検

討(事例研究)、家庭における保育との連携(保育所での集団保育を見ていただき、ミーティングを行う等)、リーダー保育士によるお手本などが必要である。(竹内園長)

- 新任保育士がプログラムを立案する際には、まず先輩保育士が書いたものを参考に使う遊具を変えるなどの自分なりの工夫を入れながら、似たプログラムを作って実践してみる。その際、先輩保育士は、一緒に考えたり参考になる文献を紹介したりして、アドバイスしている。(中川先生)
- 指導者養成機関があるので、ムーブメント教育に基づいた指導をきちんと受けることで、MEPA-R を活用する専門的な力が身につく。新任保育士が具体的に何をすれば良いか分かるように指導することが必要だ。同時に、プログラムの実践を通して、親の意見を聞いたり子どもの様子を見たりといった学びが重要だ。当園では障がい児保育の園内研修も行っている。(竹内園長)
- やり方を固めてしまうのではなく、柔軟に対応し、リーダーの補助を受けながらやり遂げることが、保育士の達成感を育てることにつながっている。(玉川先生)
- 主任保育士による新任保育士へのバックアップとして、保育ノートの交換による保育支援として一年目の保育士が毎日の保育の中で、難しさや困りごと、やりがいなどについて書き、主任保育士から意見・指導をもらい問題解決につなげている。(竹内園長)
- 新任保育士の相談に乗ることは主任やクラスリーダーの役割でもある。クラスリーダーは、新任保育士に近い年齢の保育士もいるし少し離れた年齢の保育士もいる。リーダー会は、新任保育士の抱えている課題を解決する場でもあり、組織としての支援体制を整えていることが重要である。リーダーと主任保育士のパイプも非常に重要である。保育士が自分は組織の中でどのような役割を担うべきなのかということを意識することが必要だと感じている。(竹内園長)
- リーダーが役割を発揮するためには、主任保育士がリーダー同士を細かく見て調整することが重要だ。忙しくて手が回らない場合や、誰かが不在の場合にもフォローアップできる体制も整え、1人ひとりの役割をマニュアル化(文章化)し、共有している。発達の連続性を考えると、クラス間の連携を図らなければならず、そのためにも文章化は重要である。(竹内園長)

(新任保育士の育成上の課題)

- 新任保育士には、保育士になってよかったという実感を持てる瞬間を作ってあげることが重要だろう。1年目は一人前になるための準備段階である。(竹内園長)
- できないできないというのではなく、どうしたらできるのかを考えながら行動することが重要であり、新任保育士に対しても、そのための問いかけをしてあげることが必要だ。つまり、批判ではなく、肯定をしながら保育士を育てていく姿勢が重要である。保育士の育成という点では、基本となる国の保育指針に沿って、MEPA-R の考え方をどのように結び付けて見せるかも課題だ。(竹内園長)
- 最近では心の病になってしまう保育士も多いが、そのような方に対してどのような支援をして

いくべきかも課題である。子どもの支援だけでなく、大人に対しても支援が必要になっている。認めてあげ、つまづきをフォローしてあげることが重要だ。(竹内園長)

- ・ 遅れのある子どもに関する学びについて、養成機関でどこまで学んできているかを最初の段階で新任保育士から聞き取って把握するのは難しい。実際保育に入ってはじめて、具体的な悩みについて話ができるのが実態だ。(玉川先生)
- ・ 自分が養成過程にいたときと隔たりがある。障害のある子だけではなく、気になる子との関わりは難しく、自分たち自身も難しさを感じている。新任保育士は、悩んでいるというよりも分からないのかもしれないと思う。新任保育士はいきなり「先生」という立場になるので不安だと思つため、前もって教えてあげたいとは思つが、やはり重要なのは現場でどのように対応していくかである。理解し切れていないというよりも、知識としてはあるのだが、さまざまな子どもと実際接するときに、どうしてよいか分からない、知識と実際の子どものギャップに悩むということがあるのかなと思う。子どもや子どもを取り巻く環境も変わってきており、新任保育士にとっては難しい状況だろう。(小林先生)
- ・ 子どもも先生のことを見極めるので、新任の先生は現任の先生よりも大変だとも言えるだろう。(玉川先生)
- ・ 養成過程において、多くのことを学ぶが、学んだことをどれだけ吸収しているかは疑問だ。現場が勝負であり、就職してはじめて、障害児から軽度な子、気がかりな子、家庭環境の難しい子など多様である子どもたちと出会って難しさを感じる。
そのような状況の中、保護者とのやり取りや保育で少し気になることがあつても、はっきりしていない状態で発見することは、ベテランでも難しい。(中川先生)

③ 作成するマニュアルの内容と特徴

- ・ 保育指針にあるように、発達の連続性を重視して、子どもの発達に合わせて柔軟に対応していくことが非常に重要である。発達課題の特徴を理解しながら保育を行い、何を育てるためにどのような遊具を活用するかということ盛り込みたい。教材についても、目的を明確にした上で活動内容・支援・配慮を入れる。(竹内園長)
- ・ 遅れのある子どもに気づくために、子どもの発達と障害についての知識を入れ込んでいる。そして子ども1人ひとりに向き合うために MEPA-R を活用しているということを記載する。(玉川先生)
- ・ ムーブメント教育の特徴として、人間形成の大事な時期にどのような人的・物的・自然環境を整えるかで、子どもの心身の発達により影響を与えることができること(例えば、肢体不自由の子どもが歩けるようになること等)を盛り込む。(竹内園長)
- ・ 親との関わり(保護者支援)は、序章にも含める。日々の保育の中で連携していくということを記述したい。障害についての章に親支援も含めることもできる。(竹内園長)
- ・ 理論的な記述を心がけるが、現場では専門用語を使わず分かりやすいマニュアルが求められているので、平易なマニュアルを目指す。(中川先生)

図表 104 清水台保育園「遅れのある子どもの早期発見・支援に関するマニュアル」構成

- 1.はじめに
 - ・ 子どもを取り巻く環境の変化(少子化、核家族化等)
 - ・ 地域の子育て支援の拠点としての保育園の役割
 - ・ 保育園でキャッチしている家庭環境の変化と育児力の低下
 - ・ 気がかりな行動への関わりの難しさ
- 2.今、保育園に求められる遅れのある子どもの保育支援のあり方
 - ・ 保育所保育指針(障がいのある子どもの保育と親支援)
 - ・ 集団生活の中で個の育ちを支援するための方法
 - ・ 子どもの「気がかり」なポイント
 - ・ 保育内容の充実と専門性
- 3.私どもの法人における発達・療育支援体制
 - ・ 障がいのある子どもの将来(ライフワーク)を見通した継続的な支援
(乳児期、幼児期、学童期、成人期、高齢期での支援内容)
- 4.発達障害を理解する
 - ・ 発達障害とは
(自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群、ADHD、ダウン症児)
- 5.早期発見・早期療育支援について
 - ・ 早期発見の流れと役割 (保育園、市行政、保健センター)
 - ・ 子どもの育ちを支えるネットワーク構築 (地域支援体制、教育センター／子育て・療育・教育の相談)
 - ・ 早期発見の重要性
 - ・ MEPA-R の活用
- 6.ムーブメント教育を保育や療育の手段とした当園の取り組み
 - ・ ムーブメント教育と出逢ったきっかけ
 - ・ 早期療育の軸となるムーブメント教育とは
- 7.早期発見・療育支援への MEPA-R の活用
 - ・ 子どもの発達の捉え方
 - ・ アセスメント—全体発達を側面から観察する
(MEPA-R の特色、構成、評価方法、結果の整理)
 - ・ 支援プログラムの作成
(年齢別プログラム、個別支援計画への接続)
 - ・ 発達支援ステップガイドの活用
- 8.子どもが楽しく動き、生活できるための保育環境とムーブメント活動
 - ・ 年齢別達成課題と教材・遊具の活用
 - ・ プログラム作成における配慮点
 - ・ ムーブメント環境の作り方
 - ・ プログラム実践例と進め方
- 9.まとめ

④ マニュアルの作成・活用を通して期待する効果

- ・ マニュアルを作成する作業自体が、竹伸会の障がいのある子どもの将来を見通した、継続的な支援とし活かすことになる。(園長)

⑤ 今後の活用・展開方法

- ・ 4月に新任保育士が着任した際に行う研修でマニュアルを活用したい。また、将来的には当園だけでなく、他園にも広げていきたい。(竹内園長)

(2) 清水台保育園(2回目)

① 成果ヒアリング概要

ヒアリング日時	平成21年3月18日11時00分～11時15分 ※事前資料に基づく電話によるヒアリング
ヒアリング対応者(施設側)	竹内麗子園長

② 作成したマニュアルの内容と特徴

- ・ 園長、主任保育士を含め、4名の保育士で分筆して作成した。保育士の視点に立って分かりやすいものを心がけ、清水台保育園での保育についてよく理解してもらいたい具体的な点まで盛り込んだ。
- ・ 最終的には記述の重複等の調整を行うが、全部で70～80頁程度のマニュアルになる予定だ。

③ マニュアルの作成・活用を通して得られた効果

(園での取り組みの具体化・体系化)

- ・ 法人(竹伸会)が取り組んでいる、障害のある子どもの将来を見通した継続的な発達・療育支援を、この機会に体系的に整理することができた。

(子どもの発達に対する理解の促進)

- ・ 子どもを取り巻く環境の変化や保育園に求められている遅れのある子どもの保育支援の有り方について、感じていることを文章化したことで、具体化できた。
- ・ 子どもの発達を要約することで、保育園における各年齢の基本的な発達を改めて理解すると共に、子どもの発達が連続的であることを改めて認識した。
- ・ 発達障がいについてまとめる中で、今まで専門書を読んで難しく感じていたこと、何となく分かっているけれどもはっきりとしていなかった障がいに対する理解と関わり方については、ムーブメント教育論を学ぶことで課題解決の糸口となった。

(地域ネットワークでの取り組みの図式化)

- ・ 保育園という集団の中では早期発見がしやすく、他機関との連携によってより療育支援内容が深まることを改めて認識した。現在、清水台保育園では、養護学校と連携して発達相談会（養護学校教諭が遅れのある子どもの親や保育士の相談に対応する会）を開催している。このように実質的な連携は進んでいるので、特に小学校との就学支援の実際を分かりやすく示すようにした。

（MEPA-R の有用性の再認識）

- ・ MEPA-R を活用することによって、子どもの育ちの長けている点、苦手とする点を把握しやすく、支援の手がかりをつかみやすいことを再認識した。
- ・ また、年齢別のプログラムの作成や個別支援計画の立案がしやすくなった。発達支援ステップガイドを併用した活用が有効だ。
- ・ 年齢別の発達課題と教材・遊具の活用についてもまとめたことで、日々のムーブメント活動を立案する際の手引きができた。これを活用することで、配慮すべき起点や環境の作り方などを参考にしやすくなった。
- ・ 本年の2月20日、21日にムーブメント教育・療法パワーアップセミナーを、北陸支部で実施し、その「子ども一人ひとりの発達と健康・幸福感を支える講座」に保育士全員が参加し、理解を深め、共有することができた。
- ・ MEPA-R のプロフィール表やクロスインデックス表のところは、結果として現れてきたものをどう活かしていくかと具体例をあげて示すとわかりやすいと感じた。

④ マニュアルの作成と今後の展開について感じた課題

- ・ 実用的なマニュアルとして、どの程度までまとめれば良いかについて、大変悩んだ。
- ・ 担当者によっては、文章を作成するために改めて専門書を参照したところ、資料によっては違う点、分かりにくい点があり戸惑いを感じたようだ。最終的には、「保育所保育指針」をよりどころにしてそれを基準にした説明・記述になるよう、統一した。
- ・ MEPA-R に関する記述については、保育所保育指針との整合も図りつつ記述するよう留意した。
- ・ 遅れのある子どもに対する気になる行動確認リストや、保護者との対応の仕方については、具体的な事例を整理し、今後の支援に活かせるようにしたい。